

# 「主への信仰、聖徒への愛、世への福音」

## コロサイ 1 : 3~8

堀田修一 24・12・8

I 「私たちは、あなたがたのことを祈るときにいつも、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています」：3。パウロは、人の基準で見れば動き回れる状態ではない獄中にいても、神の御手、ご計画にあり神の恵みを受け神に愛されている者として、いつも兄弟姉妹のために祈った。また、聖徒たちに与えられた数々の恵みを覚え、父なる神に感謝している。私たちにも絶えず問題や悩みがある。しかし、絶えず父なる神の恵みも与えられていることを覚えよう。パウロのように。※神はすべてを益に。獄中で。

※パウロから学べる事＝問題のある教会に手紙を書いているが、最初から、問題を指摘するのではなく（後半で愛をもって問題を指摘している）、相手の為に祈り、いつも神に感謝していることを伝える。私たちも、相手に注意することがある時に、すぐに注意するのではなく、まず神に祈り、感謝をし、愛の関係作りをし、それから「柔和な心（自分も完璧な者でないことを自覚しへりくだり）で、その人（の過ち）を正してあげる」（ガラテヤ6：1）ことができますように。

II 「キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛について聞いたからです。それらは、あなたがたのために天に蓄えられてある望みに基づくもので、あなたがたはこの望みのことを、あなたがたに届いた福音の真理のこばによって聞きました」：4, 5。3節にある神への感謝の理由が明らかにされている。コロサイ教会の人々の信仰と愛と希望。「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です」（I コリント13：13）。

1. 「キリスト・イエスに対する信仰」。過去の歴史において神であるキリストが救い主としてこの世に来られ（クリスマス）、私たちの罪のために十字架にかかり一度で成就された贖罪のみわざが自分の罪のためと信じる信仰。信仰が先ではなく、恵みの事実が先。真の信仰とは思い込みではなく、恵みの事実を聞き、知り、その恵みの事実信頼を置くことです。同時に、ここの原語は「キリスト・イエスにある信仰」。この力点は、信仰が現実生きて働かれるキリストにつながる信仰、つながっているキリストから霊的生命を受け続けるキリストにある信仰。主を信頼し主と交わる信仰。真の信仰とは主のみわざと主の御人格への信頼です。

2. このようなキリストにある生き生きとした信仰（主との命のつながり）は、必ず兄弟姉妹に対する愛の実践となって働く。聖書が語っている信仰は、決して孤立して個人の中に引きこもってしまう閉鎖的なものではない。むしろ、神を信じるゆえに、私たちの心は人種、階級の差別を越えて、救いにあずかって同じ父なる神の子とされたすべての聖徒にまで広げられて行く。聖徒たちの愛が、世の人々に対する最上のあかし。「もしあなたがたの互いに愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」（ヨハ13：35）。使徒信条にも「我は聖徒の交わりを信ず」とある。※「静まりのセミナー」の講師：太田和師のクリスチャン・ライフ成長研究会の目的＝①イエス・キリストを信じる者が、三位一体の神との交わりにおいて成長する（神との愛の関係）。②その交わりの実が、それぞれの日常生

活の中で、また、キリストの体としての交わりの中で豊かに結ぶようになる（教会の兄弟姉妹の愛の関係）。③そして、この成長と結実を通して、より多くの人々が、イエス・キリストの素晴らしさに惹きつけられ、その恵みにあずかるようになる（世の人との関係、恵みの福音の証し）。

3. 「それら（信仰と愛）は、あなたがたのために天に蓄えられている（ふろしきに包んでしまっておくの意。神によって備えられ、かつ保存されている宝を暗示している）望み（神の確実な約束。ローマ13）：

11で言われている「私たちにもっと近づいている」救い、キリストの再臨の日に完成する救い）に基づくもので」：5。「あなたがたは、すでにこの望みのことを、あなたがたに届いた福音の真理のことばによって聞きました」：5。この真の望みは、人間の想像の産物、思い込みでなく、クリスマスにこの世に来られ十字架で死なれ復活されたキリストの救いの事実に基づく福音（良い知らせ）の真理のことばの中で聞いたもの。

Ⅲ 大切な順序：まず神の恵み→福音（救い主の誕生のクリスマス・私たちの罪のための主の十字架・復活、主の姿に変えられ続ける、救いの完成の再臨という真の望みのこと）を聞く→信仰→互いの愛→神の恵みを本当に理解→福音の広がり。「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています」：6。ここでもやはり、「神の恵みを聞き」とある。神の恵みが先。次に「それをほんとうに理解した（原語：知的把握以上の心からの理解）とき」とある。これは私たちにも非常に大切なことである。私たちは、神の恵みの福音を聞き、一度にすべて理解してしまうのではなく、神の恵みの深さを本当に理解し続けることが大切。本音の部分で神の恵みを知り続ける。※証し：試練を通して「苦しみに会ったことは、私にとって幸せでした。それにより、私はあなたのおきて（みことば、恵みとまこと）を学びました」詩篇119：71）。神との交わり、互いの交わり、みことばと実生活を通して。そうするとき→「世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています」：6。福音はそのようにして私たちにも届いたのです。イスラエルでの救い主の誕生、主の十字架と復活の救いの福音が、遠い地の私たちにも届いたことを心から神に感謝したい。「そういうものとして、あなたがたは私たちの同労のしもべで、愛するエパfrasから福音を学びました。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人（自分勝手にやる人ではなく、主に忠実に仕える人）であって、私たちに、御霊による愛を知らせてくれました」：7, 8。コロサイの人々に福音を教えたエパfrasを思う時、福音が人に達するためには、それを媒介する人格的通路がなければならないことを教えられる。神は、全能で御自身で福音をすべての人に一瞬にして伝えることがおできになるのに、欠けのある私たちを愛し用いられる。福音が人に伝わるためには私たちの人格的通路、人との人格的かわり、関係作りが必要。私たちを用いてください。そのためには、人間的愛ではなく、「御霊による愛」：8が必要である。私たちは自分の力、頑張りでは愛を生み出せない。しかし、キリストはこの罪深い私たちのために十字架にかかれた。私たちを心から愛しておられる。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザ43：4）。主は、私たちの功績、業績（Doing）の前に、私たち自身（存在 Being）を愛し、自ら進んで愛の対象として私たちを選び、私たちと交わりを喜ばれる。この主を信じる私たちの心に御霊が内住し、キリストの誕生（神が人となられたクリスマス）・私たちの罪のための十字架・復活・常にともにおられる愛を教え、神からの真の愛（神と自分と隣人を健全に愛する）という実を結ばせてくださるのです。「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親

切、善意、誠実、柔和、自制」ガラテヤ5：22、23。

祈り：まず神が罪人である私たちを愛して下さり御子をクリスマスに与えて下さった愛、主の十字架の愛、復活されいつもともにおられる愛、愛を実らせて下さる御霊の愛、いつの日か救いの完成の為に主が再臨される確実な希望を心から感謝します。その救いの福音を私たちに伝える人を遣わして下さり感謝します。主にある私たちが神の愛で互いに愛し合い、祈り合い、私たちが御霊に満たされ、人々を愛し愛の関係作りをし、福音を伝えることができますように。賛美歌373にあるように「恵みにあふれる 祈りのひと時」をもって、まず神の恵みと愛にとどまり、神の恵みと愛の福音を伝える者として下さい。各クリスマスの集会を祝福して下さい。